

國學院雜誌

第貳拾八卷 第十二號

大正十一年十二月二日發行
通卷三百四十號

韻鏡研究史上に於ける文雄の位置

文學博士 滿田新造

今後時々當誌上に於て日本に於ける韻鏡研究の沿革を述べて見たいと思ふ、韻鏡の研究は寛永以後に盛になつて著書が續々世に出た（此等の書名は摩光韻鏡餘論上二丁以下に列記してある）、しかし此等の著書に於ける研究は、或は幼稚であつたり、或は難雜で要領を得なかつたりして、取り立て、言ふべき程のものはないと言つて宜しい、下て延享實暦の頃になつて僧文雄が出て、摩光韻鏡及其他の書を著し、韻鏡に關し一家の意見を立て後世の注意を引くに至つた、下に彼の功績の重なるものに就き批判を加へる。

一 支那音に依り字母の解釋を明瞭にしたること

文雄以前の韻鏡學者も無論三十六母の區別を説明しようと思つた、しかし何れも皆純日本的であつて甚不完全である、所が文雄に至つて始めて支那音抗州音を參考して、(三音正論の方には官語音をも

(1017)

参考して居る)、字母の解釋をした、其結果從來の學者の到底企及し得なかつた程度に於て、字母の區別を明にすることか出來た、下に重な點につき説明をする。

(イ) 唇音の輕重の區別を明にしたること

是は韻鏡指要錄唇音輕重の條の文が最分り易い、即

唇音ニ二類アリ梨澆並明ヲ重唇音ト稱シ非敷奉微シ輕唇音ト稱ス字母括要圖ニ見ユ其輕重ノ差別和音ヲ分ツコト能ハス故ニ韻鏡ノ註解數十家一人モ唇ノ輕重ヲ弁スルコト能ハス止華音ヲ知テ輕重ヲ辨スヘシ幫滂並明ハ唇ニ當ルコト多シ是ヲ重トス非敷奉微ハ唇ニ當ルコト少シ是ヲ輕トス(中略)韻鏡ヲ學フノ徒唇音ノ輕重錯雜シテ辨シ難キコトヲ艱ム是ヲ以テ前刻ノ韻鏡ニ文字ノ黑白ヲ分テテ輕重ヲ知ラシメタリ。

と言つて居るのは、假名附の示す通り、重唇音を p b m とし、輕唇音を f v w としたもので其當を得て居る、(但し清音と次清音 (secondary)) の區別は指要錄清濁次音の條に少しく説明してあるが明瞭を缺いて居る。)

(ロ) 舌音の輕重の區別に就き説明したること

摩光韻鏡下十一丁に端透定泥(以上重母)知徹澄孃(以上輕母)を假名附して居る、是重舌音を t d n、輕舌音を ch sh n としたものである、現今の支那音からの區別は是で善いが、文雄自身も氣附いて居る通り(摩光下十一丁)、未だ一切韻著作時代即隋唐時代の發音を示したものと云ふことは出來ぬ、何となれば是では輕舌音(知徹澄)と輕齒音(照穿牀)の區別が附かないからである、尤文雄は指要錄清濁次音の條に、

知徹澄孃ヘチツノ類ニテ舌ヲ動かカスコト多ケレハ舌上音ト名ケ照穿牀ヘチツノ類ナカラ齒ヲ叩クコト多ケレハ正齒音ト名ケタルナリ。

と言つて居るが、是は單に舌音齒音と言ふ名稱がら解釋したもので、何等事實上の根據を有しない言はゞ空論に過ぎないものである。

(ハ) 齒音の輕重の區別を明にしたること

齒音重母(精清從心邪)と孃母(照穿牀審禪)は、日本音では共にサ行の音で更に區別がない、文雄は支那音に依り、前者を ts ts' s、後者を ch sh ch' sh' として居る、摩光下十一丁の精清從心邪及の照穿牀審禪の假名附は之を示すものである。

(ニ) 曉母匣母の區別を明にしたること

此二母は日本漢音は共に力行、支那北方音でも共にたの音で區別がない、唯支那吳音及び日本吳音に於て其區別を見ることが出来る、文雄は摩光下十一丁に窩按曉匣二母清濁二音素不同、混之爲一者中原雅音也と言つて、曉に「ヒヤツ」匣に「ア」と假名附して居る、是上海音杭州音等の支那吳音に於て二者の區別あるを言つたのである、(早分りに言へば支那吳音に於ける匣母の音は、輕微な aspiration を伴ふ母音を言ふべきもので、普通のたの音とは全く區別されるべきものである)此音は日本吳音では單純なアイウエオ(合口の場合はアウエオ)となつて居る、文雄は指要錄十七丁清濁次音の條に、

匣母ノ吳音ニㄐㄑㄒニ呼ヒㄓㄔㄕニ呼フコアリ乎ノ字ハ十二轉匣母ノ胡ト同音戶吳反ㄓノ音ナリ

ヲ萬葉集等ニ⁽¹⁾ノ音ニ用ヒ回ハ十四轉母ニ屬シテ戶^ウ換ノ反^カナルヘキニ古ヨリ⁽²⁾ノ音トセリ
 (中略)懷遠慧會書等モ皆反切スレハゲノ音ナルヲエノ音トナセリ黃^{ワウ}ハ胡光ノ反グワウナルベキヲ
 ワウトシ或ハ胡^コ國ノ反ゴクナルヘキヲワクトスルモ亦同シ、
 と言つて居る。

二 關口音合口音の區別を説明したること

文雄以前日本の韻鏡學者は澤山あつたが、誰も開合の區別の分つた人はなかつた、文雄が始めて此
 區別を明にしたのは一大創見と言ふべきものである、文雄は此區別を所々で説明して居るが、和字大
 觀抄下拗音の假字の條には殊に分りよく説明して居る。

古より字音に直音假字と拗音假字と使ひわけたる事あり姫歌起飢機などにはきの假字をもちひ媽
 規危龜軌癸媿達明鬼貴魏などには拗音にてきのかなにくゑと書ク源氏根元月旦に、くゑむじ、
 こんぐゑむ、くゑつたんなと書き法花經をほくゑきやうとし變^カ作^セをへんぐゑとかける類なり是開
 合の差別なり開音の字に直音かなを用ひ合音の字に拗音假字を用ゆるなり拗音假字を一音につ
 めてよべは皆口を合せて呼ぶなり是古の時音韻を正せるならひなり。

是は先づ通俗論として開口音は直音、合口音はワ行拗音であることを述べたものである、彼は更に進
 んでワ行拗音の外、單純なウクスツスフムユルウハ木音合音ニテ開音ナキカ故ニ拗音ノ本源トナリ
 拗音假字の條に』

五十字文ノ中第三ノ横行ウクスツスフムユルウハ木音合音ニテ開音ナキカ故ニ拗音ノ本源トナリ

とあるのは其である。

かく文雄は理論上に於ては完全に開口合口の區別をなし、合口音には(1)ワ行拗音(2)單純なウ段の
 音の二種あることを認めて居るが、實地に就て各轉各字の發音を定めるに際しては、彼以後の一般の
 學者と同様の錯誤に陥つて居る、即實地に臨んでは第二の直音の方は忘れて、何時もワ行拗音の方は
 かり考へて居る、此點は流石に摩光の本圖の漢吳音の假名附には現れて居ないが、指要錄二百六韻の
 條には、第十一轉の魚韻(合口)及第十二轉の模韻(合口)の假字遣を、

魚^ウハウ^ウ非^フヨ、ク^クキ^キヨ、ス^スキ^キヨ、ツ^ツキ^キヨ、ヌ^ヌキ^キヨ、フ^フキ^キヨ、ム^ム非^フヨ、ユ^ユキ^キヨ、ル^ルキ^キヨ、ウ^ウ非^フヨナリ
 模^ウハウ^ウオ、ク^クオ、ス^スオ、ツ^ツオ、ヌ^ヌオ、フ^フオ、ム^ムオ、ユ^ユオ、ル^ルオ、ウ^ウオナリ(文雄の時代にはフキ
 ウエオが未正されてない)

としてワ行拗音にして居る、しかし魚韻模韻がワ行拗音であるなど、言ふのは途方もない話で、古今
 東西に左様の音があつたためしがない、此二韻が合口音であると言ふのは支那音に於て直音の合口で
 あると言ふことである、即摩光本圖各字の下に假名附してある支那音、例へば魚韻の方では貯は「チユ
 イ」舉は「キユイ」暑は「シユイ」(ch, k, sh)、模韻の方では通は「ブウ」孤は「クウ」呼は「フ
 ウ」(p, k, m)が其である、(猶舌音の都等はツウ)(E)齒音の租等はツウ(ㄷ)ノ音が善い)、即「ユ」
 「ウ」の音が合口音である。

三 韻鏡は音圖にして反切の爲に作れるに非ることを明にしたること

韻鏡は單に音圖であつて其以上の何物でもない、隨て反切の爲に作つたものでない、譬は日本の五

十音圖の如きものである、秩序的に日本の音を並べて見れば此通であると言ふのが五十音圖である、之と同様に支那の音を秩序的に並べて見れば此通と言ふのが韻鏡である、唯是だけの事である、無論反切の場合に韻鏡を借りて照し合せれば説明に都合よいことがあるかも知れぬが、(いや實を言ふところな事をしては、却て不便不利難解となるから、止めにするが善い)、其は韻鏡を利用したもので、韻鏡本来の目的でない、然るに昔から韻鏡は反切の爲に作られたとの誤解があつて、其が爲に反切門法の研究といふものが起り、少からの弊害を醸して居る、文雄は此點に於て從來の謬見を指摘訂正して居る。

反切を韻鏡に照し合せて考へる場合に、反切の切字(父字)の示す縦線と韻字(母字)の示す横線の會合點に、歸字のあることを期待するのは無理ならぬ要求と言ふべきものである、所が韻鏡圖面の組立は日本の五十音圖のやうに簡單明瞭には出来て居らぬ、隨て前記の期待に反して歸字が縦横二線の會合點になくて、他の場處に見出されることが多い、所で他の場處に有り具合が種々様々である結果、茲に寧ろ有害無益と言ひたい反切の種類即門法の研究が起つて來た、先づ韻鏡を世に紹介した南宋の張麟之からが、其序文の劈頭第一に、

韻書雜字過、不知音切之病也、(中略)、既而得友人、授指微韻鏡一編、且教以大略、曰反切之要莫妙於此。

と述べ、それから門法の研究をやつて居る、一切韻指掌圖、切韻指南の如きは皆韻鏡類似の音圖であるが、切韻の二字を添へて全然反切の圖であることを看板に掛けて居る、後の學者は皆之に倣つて、反切門法の研究を非常に重要と考へ幾々説明解釋を施して居る、尤前述の範圍内で研究や説明をやるなら大して弊害もないが、門法研究熱が高じた結果、成るべく門法の研究を面白く賑かにしようとした爲、慰半分に出處の知れぬ反切を無暗に引張出し、又は自分勝手に新しい反切を作り鹿瓜らしい顔をして、珍奇な門法の講釋をして得意になる風が起つて來た(猶此外に自分の用いて居る韻鏡の文字排列に誤謬があるのに氣附かないで、其に照して種々の門法實例を掲げ示して居る者もある)、所が日本の韻鏡家の中には、かやうの常談半分の細工を眞面目に受け取つて、一生懸命其理解に頭を苦めた者がある、かうなつては韻鏡研究は學者いぢめの無駄骨折で實につまらぬものとなるのである、太田方の漢吳音圖說に(一丁ウラ)

サテ韻圖ニテ檢スルニ猶疑惑スルコト多シ因テ反切スル法ニ音和類隔雙聲疊韻等ノ種々ノ名目アリテ學フニ址カタク因テ宿學ト稱セラルル人ニモ韻鏡ノ用ヲシラヌ人多シ

と言つてあるは、全く實際の弊害を道破したものである。

文雄は善く韻鏡の本質を知り、門法研究の邪路に陥つたことを看破して居る、先座光下素隱の劈頭第一に韻鏡者音韻之譜也と喝破し、指要錄には非反切圖と言ふ條を設け其中に、

反切ノ學ハ天竺ヨリ傳ハリテ後漢ノ代服虔始メテ此事ヲ用ヒ孫炎益ニ行ヒシヨシ諸書ニ見エタリ爾後三國六朝ヲ歷テ隋唐ニ到ルマテ其術同シク唇フヘキ弄ニテ反切シ圖ヲ用フルコナカリシニ宋ノ時創メテ韻圖ヲ按シテ反切スル術アリ故ニ切韻指掌圖ニ其法ヲ誨示セルナリ今韻鏡ハ唐ノ代ニ作レリ反切ノ爲ニ作レルニハ非ズ其世ノ人圖ヲ按シテ切スルコトヲ用ヒス按スヘキ韻圖アルコトナケ

レハナリ然レハ韻鏡ノ作者反切ノ爲ニ設ケサルコト明ラカナリ
又翻切伐柯篇の反切總論の中には、

其反切ノ術甚タ難キニハアラス學ハサルカ故ニ知ラサルナリ凡ノ反切スルニ韻圖ヲ按シテ歸納ヲ
鑿ミサレハ反切成セスト思フカ故ニ反切ノ術甚タ難マシク人皆倦ミ疲レテ此學ヲ廢スルナリ是未
ダ反切ノ正法捷徑ノ術アルコト知ラサレハナリ其韻圖ヲ按シア反切スルコトハ古ヘノ無キ所ニシ
テ中世已來ノ弊ナリ韻圖アルコトハ宋以來ナリ數百歳ノ前ナル漢魏ノ代ヨリシテ反切ノ術アリ是
ニ由テ考ヘ知ルヘシ古人反切ヲ作爲スルハ韻圖ヲ用ヒスシテ其術成スルナリト云フヲ
次に摩光下索隱の條の始に、

麟之以降徒以爲切韻書、胡敢知其本、故此書終不震于支那可惜哉、本邦枕近諸家統爲疏、要借張
氏之奴隸也耳、流弊遂至反切名諱、謬妄不可言也、孰知韻鏡明々者也、於乎明鏡被塵翳者殆于載、
雄之此舉欲一除塵翳、故以磨光題云

と言つて居るが、至極尤な議論である、猶文雄は摩光下の翻切門法中に諸書の門法分類を批判統一し
て説明して居るが、大體要領を得たものである。

結 論

韻鏡は支那で出来たものである以上、轉訛した日本音だけで本當の解釋が出来る筈がない、文雄が
支那音の研究を始めたのは、韻鏡の嚴正な研究に向つて一步を進めたもので、着眼宜きを得たものと
賞讃せざるを得ない、然るに惜しい哉、文雄に隨喜する者は續いて出たが、其研究の精神を受繼ぐ者

は更になかつた、爲に嚴正の意味に於ける韻鏡研究は僅に芽を出しただけで發育せず終つた。

猶文雄の試みは韻鏡研究の爲の韻鏡研究であつた、其目的は全く純粹のものであつた、然るに其後
の本居宣長の研究に至つては、日本古書説明の爲の韻鏡研究となり、多少韻鏡利用といふ不純な考が
雜り、茲に漢吳音圖一派の珍妙が韻鏡解釋が胚胎するに至つた、かくて韻鏡研究は益嚴正な意味から
遠かるに至つた。

(附記)摩光韻鏡は廣韻に依つて從來の韻鏡の文字を訂正増補したもので、除程便利なものである、
又假名附してある漢音吳音も、無論訂正すべき點はあるが、例へば漢吳音圖派の學者などの考へる
やうに杜撰なものでは決してない。(完)

* * * * *